
IS ~ インフィニットストラトス ~ 黒騎士は織斑一夏

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉黒騎士は織斑一夏

【Nコード】

N7189X

【作者名】

A S T

【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう
気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。
この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな？という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

第一話（前書き）

とうとう書いてしまった連載小説
どこまでいけるか分かりませんが
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願いします。

第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れニート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「この子の名前は

」

第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態ニート
神を呪っていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は
やっと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。

まあ、ここまでは良かった。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・
ストラトス、通称IS

篠ノ之束によって開発され、女性しか起動できないと言う欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によって造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園

「何故、俺はここに居る・・・？」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となった幼馴染に目をやる
と目を逸らされた。

本来、男である筈の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまったからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言ったら
それ何てギャルゲー？と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言っ
たのを覚えている。

その時は「そうか・・・」と素っ気無く返したただだったが、
この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ごす
のかと考えると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ！と

「———くん、織斑一夏くん」

「む・・・？」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでいた。

「あ、あの、大声出しちゃって、ごめんなさい。あの、お、怒ってる？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！で、でも自己紹介、『あ』から始まって今『

お』なの・・・

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？」

ダメ？と涙目になっている山田先生を落ち着けてから自己紹介をする事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

ぶっきらぼうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えっと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キーン！！

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだろう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気は漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも二回りも年上の大人であるかのように感じさせる

一夏にときめきを覚えた。(個人差はあるが)

「お前がそういう性格なのは分かっていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとって唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだろうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパアン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「・・・分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言った様子で居たのだった。

第二話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでもくださり、ありがとうございます。

第二話

授業が終わり少しの間の自由時間となった。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。

彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合っていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちよつといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そう」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

第二話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでした。

「久しぶりだな、篝。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かったか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かった。」

「そ、そうか？」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

箒は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあった幼馴染

姉妹揃って人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素っ気ない会話ばかりだった。

まともな会話をする様になったのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かって一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなった。

子供なら気絶する寸前の殺気をぶつけたのだから当たり前である。

ちなみに一夏は気づいていないが、この時の箒の一夏を見る眼は王子様を見る眼だったらしい

それから一夏は箒を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元気づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている箒をどう元気づけようか必死に考えていると唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思いついた結果である。効果は抜群だった。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「・・・どうやら元気になった様だな。感謝するぞ、バビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やっぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか・・・そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思った一夏は過去の思い出から帰還して箒に言った。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。」

「

「そう・・・だな」

少し残念そうな表情になる箒を見て一夏はやれやれと言った様子で溜息を吐くと

「・・・箒」

彼女に急接近し

「なッ、ななな何だ？」

箒の頬が赤く染まるのにも構わずに

「綺麗になつたな」

そう言つて昔の様に額にキスをした。

「~~~~~!!!!!!」

「??????」

箒は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅゅゅと蒸気を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすっ飛んで行った。

「・・・熱でもあつたのか？」

当の本人だけが何も分かっていなかった。

“やっぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんって思えるよね？”

と、また何処かで、好意を抱く自分の後輩を弄るクォーターの少女が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った二人であったが、篝の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており

千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

当の本人はやっぱり気づいて無かった。

第二話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。

直接、話に関わることはありません。
多分ね

第三話（前書き）

今回、マキナー夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊している様な気もつとしてきたぞ？

・・・やっべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ
プレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・うん、やっぱり無理

第三話

「~~~~~であるからしてISの基本的な運用は~~~~」

一夏が箒と教室に戻ってきてから、現在二限目の授業を受けている。相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

箒の方はぶしゅくと顔を真っ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思ったのか

「えつと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ!？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です!大丈夫です!」

物凄い動揺しながらも答える箒

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻ってきた様子やそれからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあった!

と確信するのだった。

「ちょっとよろしくて?」

「・・・む?」

二限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの! そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですから

それ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら?」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英国の代表候補生か・・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしやらないのは、如何なのかしら?」

「覚えていない訳では無い。セシリア・オルコット」

ジロリとセシリアを見ると、ぶつきらぼうに言う

「何の用だ?」

「まあ! 何て物言いでしょう!? 本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ? その辺りをお分かり頂けるかしら?」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか!?!」

喰ってかかるセシリアと我興味無しと言った様子の一夏

まるで構って欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん! まあ、よろしいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

ある程度落ち着いたセシリアが偉そうに言うが

「俺も倒した。」

「・・・・・・は?」「」「」

セシリアだけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで

呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたか!？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言うのですか!」

「ああ」

「どうやって!？」

ガアツと再び食って掛かるセシリア

教官を倒したと言う事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているクラスメイト達

彼女らに説明するように一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで?」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと?」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「……………ひどっ!!!」「……………」

実際、相手になった真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴って試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしい

おそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろう

その後、千冬に“お前は教官を潰す気か!”と怒鳴られた。すると、チャイムが鳴りだした。

「ッ!…っ、続きはまた後ですわ!」

セシリアは捨て台詞を吐くと自分の席に戻ってゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立った千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリアは捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか——「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英国には礼儀と言う物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると云う事だ。

「なっ、私の祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのは貴様だ。英国人^{ライミー}」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですわ!！」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝ったら小間使い!いいえ、奴隷にして差し上げますわ

!！」

「俺が勝った場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ!

もし貴方が勝ったら奴隷でも何でもなっ差し上げますわ!！」

まあ、そんな事あり得ませんが!と云うセシリアに一夏は問う

「手加減はどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラス的女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのって大分昔の話だよ?」

口々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそうに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか?」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。」

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言ってセシリアを見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑った。

それに気づいたのは筈と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う」

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

千冬がそう言って纏めると、授業が始まったのだった。

第三話（後書き）

さっさと原作買って読まない和不味いな・・
金使いたくないから中古で買おうと思うけどあるかな？
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ
感想をくれるともっと嬉しいです。

第四話（前書き）

感想をくれた皆様、お気に入り登録をしてくれた皆様
本当にありがとうございます。

皆様方の応援や感想を見ると、本当にこの作品を投稿して良かった
と思えます。

これからも、よろしくお願いします。

さて、今回の話は、ネタ有り、エロ有り、笑い有り、青春有り、と
様々な劇が繰り広げられます。

ゆえに面白くなると思うよ

では読者の方々、彼ら彼女らの織りなす劇をご覧ください（ニート風）

第四話

押し倒した彼女の糸纏わぬ裸体が一夏の眼に映る。

上気した彼女の頬

シャープな輪郭の顔

凜とした意志を感じさせる眼

ベッドの上に広がる濡れた黒髪

豊かな胸

ほっそりと引き締まった体のライン

くびれのある腰

しなやかに引き締まった脚

それらが集まり一つの芸術品であるかの様な美しさを醸し出している。

そして目の前の彼女は初夜を迎える生娘の様に

「一夏……」

その瞬間を待つように目を閉じる。

第四話

話は放課後に戻る。

本日の授業も終わり、授業の復習の為に教室に残っていた所へ真耶がやって来た。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。良かったです。」

「何か？」

「えっと、織斑君が生活する寮の部屋が決まりました。」

「……自宅通い」

少なくとも一週間は自宅通いと言う事を一夏は聞かされていた。すると真耶はこっそりと耳打ちしてきた。

「そんなんですけど、事情が事情なんで一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したみたいなんです。・・・その辺りの事は政府から聞いてます?」

一夏は首を横に振った。しかし一夏は事情を理解した。

本来なら女性にしか動かさないはずのISを動かした唯一の男性操縦者

その価値は計り知れないものだ。

入学式になる日まで自宅の前にはマスコミがたくさん集まって来ていたし

解剖させてくれ、体を調べさせてくれ、等と言ってきたマッドまで居た。

仕方なしに取材を受けた時の受け答え

「世界初の男性IS操縦者になった気持ちには?」

「どうでも良い」

「やはりあのブリュンヒルデの弟と言った所ですね」

「下らん、俺は姉の付属物では無い」

「何か一言を!」

「特にない」

「研究させてくれ！」

「貴様が永遠に呼吸しないで生きていたらな」

と最後に変なのが混じっていたが、いつもの調子で受け答えしていた。

「と言う訳でして、政府の特命もあつて織斑君を寮に入れる事を優先したらしいです。」

「一月もあれば個室を用意できるので、それまでは相部屋で我慢してください」

ふむ・・と一夏は顎に手をやってから気づいた。

「荷物は？」

「それなら私が手配した。ありがたく思え」

「姉・・織斑先生が？」

荷物などは一週間後から運ばれてくる様になっていたが

どうやら千冬が手を回してくれたらしい

「相変わらず、何も無い部屋だったかな・・」

その言葉に真耶が驚いたように千冬に尋ねる。

「えっ、織斑君って私物が少ないんですか？」

「ああ、昔からこいつは必要最低限の物しか持たん。」

「じゃあ、趣味とかは・・・」

「強いてあげるとしたら、料理や家事か？」

「それって一般の男子から離れているんじゃない・・・」

「家事が出来ない姉を持つところな、ぶっ!!!?」

最後まで言い切る前に千冬のチョップが一夏の脳天に直撃していた。

「人の個人情報を漏らすな」

「・・・弟の個人情報は良いのか？」

「お前は私のモノだ。拒否権は無い」

誤解を生みそうな発言である。

現に真耶は顔を真っ赤に染めて、イヤンイヤンと体をくねらせている。

「・・・・・・・・不条理だ。」

「弟は姉に逆らってはいけないと決まっている。」

常識だろうか？と千冬は言い放った。

姉が白と言えば何色であるつとも白、黒と言えば何色でも黒

それが織斑家の不文律であり、絶対の法則

姉と言う座から流れ出た法則である。

『流出：絶対に君臨せし姉』である。

「とにかく四の五の言っても何も変わらん。生活必需品だけで充分だろう?」

「俺のレシピは・・・?」

その言葉に衝撃を受けたかのように固まる千冬

「くっ、不覚!この私がまさか一夏のレシピを忘れるとは・・・」

そのレシピには今まで一夏が培ってきた料理だけで無く、

マッサージ等の技術やテクニックまで書き記してある。

正に一夏の技術が詰まった秘蔵の書である。

別名、シスコン白書

全てが千冬の為に習得した技能であるのだが・・・

彼女に養われていた一夏はせめて自分が出る全ての事をしよう

彼女の為に出来る事を死にもの狂いで習得していったのだ。

その話は置いておいて

一夏は真耶から渡されたメモ用紙に書いてある番号の部屋1025室へと向かっていた。

部屋に入ると、そこら辺のホテルとは比べ物にならない程の設備だった。

取り敢えず自分の荷物に入ったダンボールを確認した直後

「ああ、同室の者が。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之ほう・・・き・・・」

シャワー室からバスタオル一枚の姿で出てきた筈の姿が・・・

「「「「「「「「」」」」」」」」

バスタオルを体に巻いているのではなく、体に押さえつけている状態の為

結構、きわどい所まで見えていた。

まず目に付くのは、バスタオルで隠しきれない程の豊かな胸の膨らみ

幼少の時に見た幼女の裸では無く

成熟した体つきとアジア系の未熟な顔つきという

アンバランスであるが故の魅力があった。

随分と女らしくなった成長したものだな・

と、約2秒でここまでの評価をした一夏を凄いと言っべきか

箒は、そんな一夏を見ながら肩を震わせている。

「・・・寒いのか？」

「ぎゃあああああああッ！！！！」

悲鳴を上げると同時に、箒は部屋に置いてあった竹刀を取り

一夏に向けて振り下ろす。

躲す素振りさえ見せなかった一夏は、そのまま脳天に一撃を受けて倒れるかに思えた。

が、ここに居る一夏はただの一夏では無い

バシィ！と右手で竹刀を掴んで受け止めると、

勢い良く自分の方へ竹刀を引き寄せる。

同時に竹刀を握っていた箒もそのまま引き寄せられ一夏の胸にダイブする。

その勢いそのまま箒を抱き寄せ半回転して、彼女をベッドに押し倒す。

両腕を押さえつけ抵抗できないようにする。

「落ち着け」

そう言っただけ彼女の姿を改めて見る。

バサツと幾分か水分を吸って重くなったバスタオルが落ちた音が響く

そして冒頭に戻る。

「一夏・・・」

何かを待つ様に目を瞑る箒を見て

流石の一夏も何をすればいいか分かっていた。

「箒・・・」

チュツという音が彼のキスした所から聞こえた。

彼女の頬から……

「ふえっ？」

箒は自分が予想していた場所とは違う所にキスをされて

驚いた様にも、残念そうな様にも聞こえる声を上げたのだった。

「落ち着いたか？」

一夏は彼女の顔を覗き込みながら聞いた。

「あ、あう……」

プス……プス……プシュウゥと先刻と同じ様に顔が真っ赤に染まり蒸気を噴き上げる箒

一夏は顔が近いから話しづらいのだろうと思い、顔を離れた。

成熟した箒の体を改めて見ると大人顔負けのプロポーションである事が分かる。

箒の全裸、二つの母性の頂点とか下腹部の成長具合と言った

本来隠されているべき場所までしっかりと見ていた。

まあ最近では色々と解禁されているから、直接的な描写が無ければ問題無いだろう。

と、一夏がメタな事を考えた瞬間、部屋のドアが開かれ

「なんか凄い悲鳴が聞こえたけど、大丈夫!？」

「何、どうしたの!？」

「何があったの!？」

箒の悲鳴を聞きつけた女子生徒達が突入してきた。

「……………あ……………」

その場にいた全員の声が重なる。

今の一夏と箒の状況を見て、第三者はどう思うか？

制服姿で全裸の女子を押し倒し、抵抗できない様に腕を抑えている
男子

状況証拠的に言い逃れは出来ない状況である。

このままでは一夏が性犯罪者となってしまう!!

と、約0.2秒で判断した箒は無我夢中で口を動かしていた。

「ち、違っんだ!これは……私と一夏の訓練だ!！」

その発言がどれほどの誤解を生み出すのかも知らずに……

一夏と篝の親密さは休み時間の様子から、

即座に学園中とはいかないが同学年の生徒たちの間では広まっていた。

そして明らかに性犯罪としか見えない状況で言い訳しているのが男では無く、女の方

それらを加えて彼女たちが下した判断とは

「「「「「「し、失礼しました！！どうぞごゆっくり~~~~」」」」」」

「だから、誤解だアアアアアアツ！！！」

無慈悲にもドアがバタンと閉められた。

“これで明日には、一夏と自分はこういう仲だと学園中に広まってしまうのだな・・・”

そこまで考えた篝は「おや？」と考える。

“あれ？むしろ、これで私と一夏は公認の仲になったのでは？”

と、乙女的思考回路が神速の如き速度で答えを導き出した。

“し、しかし、なし崩し的に一夏とそっいう仲になるのは如何か？”

と、今度は篝の良心が咎める。

女神で天然で巨乳の金髪碧眼フランス娘に終了させられたのだっ
た。

決して、

育てられた環境のせいで世渡りが上手く

高い人気を誇る尽くしてくれる系の男装美少女では無い

部屋の外に出た一夏は箒が着替えるのを待っていた。

少し時間が経ってからドアの向こうから箒の声が聞こえた。

「入れ・・・」

ドアを開けて、部屋に入ると剣道着を来た箒が立っていた。

その顔はかなり真っ赤に染まっており、体が震えている事から
相当な羞恥心に身を焼かれているのだろう

まあ、意中の男に風呂あがりの姿どころか

フルヌードを見られてしまったのだから、無理も無いだろう。

こうして顔を合わせるだけでも、必死で耐えている事が分かる。

対して、一夏は表情を変える事も無く

「すまなかつたな、箒」

深々と頭を下げるのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・沈黙が二人の間を支配する。

未だに頭を下げたままの一夏、何を話せばいいのか迷っている箒

二人の間で時間だけが過ぎ去ってゆく

「とりあえず、頭を上げる・・・」

箒がそう言うと一夏は頭を上げ箒を見る。

彼女は顔を紅く染めたままだった。

「さっきの事は水に流そう、それの方がお互いの為だ・・・」

「そうだな・・・」

このままでは何時まで経っても、お互いにギクシャクしたままだ。

ならば水に流してしまった方が良く、と箒は考えたのだった。

かなり惜しい事をしたとは思うが、

これからの生活で一夏との仲がギクシャクして話し辛くなるよりはマシだ。

それに同室で一緒に過ごすならば、まだまだチャンスはある。

“モッピー知ってるよ、一夏はこんな18禁ハプニングでは揺らない男だったこと。”

箒の脳内に座す軍師モッピーは己の知識を総動員して

状況を判断し、箒にとっての最善の決断を導き出したのだ。

（感謝するぞ、モッピー！）

形容し難い笑みを浮かべるデフォルメキャラに礼を言う箒

“箒にとって最善の未来を導くのがモッピーの役目だって知ってるよ”

そんな声を残してモッピーは己の内に帰って行くのだった。

二人はとりあえずベッドに腰掛ける。

「お前が私の同居人なんだな・・・」

「嫌か？」

何て事も無いように聞いてくる一夏に箒は

「別に嫌と言う訳では無いんだ・・・しかし“男女七歳にして同衾せず”と言っただろう?」

軍師モツピーの助言で幾分か素直になっただらしい

「ああ・・・俺もそう思う」

だが、と一夏は続ける。

「国からの要請だ。仕方無い」

やはり一夏は大人だった。

「それに幼馴染であるお前と一緒にの方が落ち着く」

「そ、そうか、私と一緒にの方が落ち着くのか・・・嬉しいものだな」

そう呟いた筈の笑みはとても優しげで、綺麗だった。

「何故だ?」

「昔から一夏には助けられてばかりだった・・・だからお前に頼られるのは嬉しい」

「そうか・・・」

何時しか二人の間には春の陽だまりの様に優しい空気が流れていた。

と、ここまでならいい話で終わったのだろうか……

ふと、視線を感じた一夏がドアの方を見ると

じ~~~~~と、ドアの隙間から見ている乙女達が居た。

自分の部屋に戻っていたかと思いきや、最初から見ていたらしい

ニヤニヤと二人の甘酸っぱい青春劇をゆっくり鑑賞していたらしい

主に同じ乙女である筈の方ばかりだが……

この劇の主役は一夏では無く彼女の方だったらしい

「……鍵をかけ忘れたな」

「きゆう」

流石に羞恥心の限界を突破したらしい筈は

珍しく可愛らしい声を上げて意識を手放したのだった。

「篠ノ之さんも乙女よねえ……」

「うんうん」「うんうん」

三年生の先輩の一人の言葉にみんなが同意した。

“ やれやれ、だな…… ”

一夏は仕方ないとばかりに筈をベッドに寝かせると彼女の頭を慈しむ様に撫でる。

“ 少しは成長したと思ったが、まだ未熟な子供だな…… ”

まるで彼女の兄か父親の様な事を思いながら、彼は来客者の相手をするのだった。

どうやら神は意外と恐怖劇以外の演出もするらしい

第四話（後書き）

はい、どうでしたか？

今回は前回の三倍以上の文字量です！

気づいたらこうなっていたんだ。

一回これ、自動的にやり直しになったから

はっちゃけた文は無しにします。

勝手にユーザートップに戻った時の脱力状態で今、必死に書いてます。

さて次回は、決闘までの日々を短い話で書くか、抜かして決闘を書くか、悩んでいます。

後、詠唱にゲーデやアーサー・ハーバートの詩をそのまま使おうと考えてますが

著作権とか、大丈夫ですよ？一応、コピーしたサイトには違反していたら削除しておきますって書いてあったから・

ただ、セシリアとの対決はある意味、期待を裏切るかもしれませんがと言って置きましょう、だって、大学の講義中に思いついたんだものセシリアとの決闘は当初予定を変更します。とだけ言って置きます。まあ、変わるかもしれないですけどね。

第五話（前書き）

はい、今回は戦闘です。
初戦から創造とかが出ます。

それではどうぞー！

第五話

セシリアとの決闘の当日、放課後の第三アリーナAピットには一夏と箒が二人きりでいた。

観客席にはクラスメイト達が、管制室には千冬と真耶が居た。

セシリアは先にISを展開して、一夏を待ちかまえている。

一夏は箒と共に自分の専用機が届くのを待っていた。

第五話

「来ないな……」

「ああ……」

するとスピーカーから真耶の声が聞こえてきた。

『織斑君、来ました！織斑君の専用IS』

『織斑、すぐに準備をしる。アリーナの使用時間にも限られているからな、初期化と最適化は実戦でやれ、お前にとって、この位は問題ないだろう？』

ハッチが開き、視界に入ってきたのは“白”だった・

「これが一夏の専用機・・・」

『織斑君の専用IS“白式”です。』

純白の機体に触れ、精神を集中する。

“ニグレド黒騎士の俺が、アルペド白騎士を使う事になるとは・・・これも何かの縁か”

そう思って、彼は“白式”を装着し一体化する。

“しつくり来るな・・・”

やはり前世での経験がISとの同化に役立った様だ。違和感が無い

『織斑、気分はどうだ？行けるか？』

「大丈夫だ。行けるさ」

その言葉に千冬は“そうか”とだけ返した。

「一夏・・・」

筈が不安げにこちらを見るが、一夏はカタパルトの方を向く

「行ってくる・・・」

「ああ・・・勝つて来い」

フツ、と笑うとカタパルトから発進する。

「織斑一夏・・・出る。」

黒き騎士は新たな力を得て、再び戦場に羽ばたいた。

嘗て黒騎士と呼ばれし男は、新たな世界で白き装甲を纏い、ここに蘇った。

アリーナ上空まで上昇し、待ち構えていたセシリアを見る。

「あら、やっと来ましたのね。待ちくたびれて仕舞いましたわ」

「それはすまない、ISの搬入が遅れた。」

だが、と一夏は続ける。

「この戦いは退屈させん」

「あら、たいそうな自信ですわね。」

互いに相手を見据えて、集中する。

『これより、クラス代表決定戦、織斑一夏 対 セシリア・オルコットの対戦の始めます。』

真耶の号令と共にセシリアが先手を取った。

彼女の持つスターライトMk ？から放たれたレーザーが一夏へと向かう

「・・・遅いな」

それを身を振り、紙一重で躲す一夏

「さあ、踊りなさい！！この私とブルー・ティアーズの奏でる円舞^{フル}曲を！！」

続けてレーザーが襲い掛かってくるが、全てを紙一重で躲し続ける。

「遅い、遅すぎるな・・・」

彼にとってレーザーの速度は、光速であるのにも拘らず慣れてしまっている。

前世に於いて約五十年間もの間、マキナは魔城で二人の騎士と訓練をしてきた。

その片割れである白騎士の称号を持つ少年：ウォルフガング・シュライバー

彼の能力は絶対先制加速、これによる速度の上限は無い

故に彼は光速の相手であっても、その上に行く神速の速さとなる。

そんな超加速能力を相手にしていれば、嫌でも速さに慣れる。

まあ相性上、彼は一度も攻撃を当てる事は出来なかった訳だが・・・

馬鹿げた速度に慣れてしまっているが故に、高速対応が可能な反射神経なのである。

体は一夏であるが、最近になって音速までなら完全に対応できるようになった。

流石にレーザーの光速には対応できないが・

“ まだまだ、射撃も未熟だな ”

中身が歴戦の戦士である一夏は、彼女の射撃をそう評した。

「 棒立ちでは、相手の射撃兵器の的だぞ? 」

悠々绰绰と一夏は彼女の欠点を述べながら、高速移動で彼女の横へと回り込む

そして近接用ブレードで切りかかる。

「 くっ!!!? 」

間一髪の所で回避したセシリアは一夏から一旦距離を離す。

まさか、接近を許してしまうとは思ってもいなかったセシリアは本気で一夏を倒そうとする。

「 貴方が初めてですわ。ここまで私の攻撃を避けたのは。 」

その貴方に敬意を表して全力で行かせて頂きますわ! 」

ブルーティアーズの肩の装甲から、四機のビットが射出される。

「む……」

それぞれが別々の方向から一夏に向かってレーザーを放ち始めた。

それすらも躲してゆくが、

その内の一撃は躲しきれ無いと判断したの一夏は右手のブレードで叩き切った。

「なッ!？」

まさかレーザーを叩き斬るなんて非常識な真似をするとは思っていなかったセシリアが驚きの表情で一夏を見た。

「まだ、戦いは始まったばかりだ……全てを見せてみるがいい」

まるで、彼女を試しているかのように言い放つ一夏

その眼は、まだこの程度ではないだろうか?と語っている。

「いいでしょう、この私、セシリア・オルコットの全てを貴方に見せてあげますわ!」

セシリアは己の全てを一夏へ見せつける為に戦う

“未熟だ……ならば、この戦いを教訓に出来るものへと変えて

やるっ”

一夏は先生的な事を思いながら、彼女の円舞曲ワルツに付き合っただった・
・

モニターでそれを見ていた篤は一夏の行動に疑問を持っていた。

「何故、追撃しなかったんだ・・・？」

一夏がセシリアを切り付けた直後に、追撃していればダメージを与えられた筈だったのだ。

「多分、オルコットのワルツに付き合っつもりなんだろう・・・」

千冬が篤の質問に答える。

「どうしてですか？早く決めてしまえば良いと思わないんですか？」

真耶が不思議そうに聞いてくる。

「あいつは戦士だ。戦いの中でオルコットを教育するつもりなんだろう・・・」

「教育って・・・オルコットさんは代表候補生ですよ？」

「だが、実戦の経験も無く、戦場を知らない」

“私もだがな”と付け足して真耶の疑問に答える千冬

「では、織斑君には戦場の経験があるんですか!？」

「いや、無い筈だ・・・だが、あいつは明らかに戦場を、闘争を知っている。」

そう言った千冬表情はどこか悲しげであった。

試合開始から十分後・・・

セシリアは自分の胸の内の変化に戸惑っていた。

彼の戦士として眼に男を感じ、胸が熱くなるのはどうしてか？

自分を見守るような父親の様な眼に安らぎを感じるのはどうしてか？

“自分の胸の内を焼く、この感情は何だ？

数瞬の後、彼女はその答えに思い至る。

“ああ、そうですね・・・この感情が恋と云うものなのですね・・・”

己が内に芽生えた感情は、自覚した途端に更に激しさを増しながら

燃え上がる。

彼に自分の全てを見て欲しい・・・そして、その全てを受け止めて欲しい、と

この時、セシリア・オルコットのの中に生まれた想いは確かに渴望だった。

そこに水銀の手が加われば、永劫破壊の術式はここに完成する。

“さて、彼女が語るのは道を求める物か？道を覇する物か？”

彼女の口から語られるのは、己が渴望の具現化

一夏の眼が僅かに驚愕で見開かれる。

Love bade me welcome : yet my soul drew back ,

愛は私を喜んで招き入れてくださった、だが私の魂はしり込みしていた

Guilty of dust and sin .
塵と罪に汚れていたからだ

But quick - eyed Love , observing me grow slack

だが慧い眼をお持ちの愛は、私がぐずぐずしているのを見ておられた

From my first entrance in ,

私が初めて戸口に入った時から

Drew nearer to me, sweetly
questioning,

私に近付いて、やさしくおたずねになったのだ

If I lack'd anything.

客人が、私は答えた、ここにふさわしくないのです

A guest, I answer'd, worthy to
be here:

何か足りないものがあるのか?と

Love said, You shall be he.

愛はおっしゃった、お前がその客人になるがいいと

I the unkind, ungrateful? Ah, my
dear,

私のような薄情で恩知らずな者ですか?ああ、わが愛しきお方よ

I cannot look on thee.

私はあなたを見つめることもできません

Love took my hand, and smiling
did reply,

愛は私の手を取り、微笑んでお答えになった

Who made thee eyes but I?

私でない誰がその目を作ったというのだ?

Truth, Lord, but I have married
hem: let my shame

真実です、主よ、ですが私はそれを汚してしまいました、私の恥に

Go where it doth deserve .

しかるべき報いを受けさせてください

And know you not, says Love, who
bore the blame?

お前は知らないようだな、と愛はおっしゃった、誰がその責めを
負ったのかを？

My dear, then I will serve .

わが愛しきお方よ、それではお仕えしましょう

You must sit down, says Love, an
d taste my meat :

お座りなさい、愛はおっしゃった、そして我が肉を食べるのです

So I did sit and eat .

そこで私は座り、いただいたのだ

Cru

創造

Seren go laud ydd tei mlad syrth
io mewn cariad

星光降り注ぐ、恋慕心情

彼女を中心に異界が展開される。

しかし、世界が灼熱の世界に変わる事も無ければ、紅い月が照らす夜になる事も無い

だが、彼女の世界が生み出された事だけは確かであった。

「織斑さん……いえ、一夏さん……私の全てを受け止めて下さいな」

熱っぽい声で愛しい彼に告げた彼女は、同時に蒼き雫達を一斉に放った。

一夏はそれを油断せずに回避しようする。が・・

「言った筈ですわ、全て受け止めてと……躲そうとするなんて酷いではありませんか」

彼女がそう言った直後、蒼き雫達から放たれたレーザーが拡散した。

まるで雨の雫の様に丸く小さな光の弾が、豪雨の如く彼に降り注ぐ
！！

「——ッ！！！！」

最大出力で急速上昇し、雫の弾幕から脱出するが

全てを躲しきれず、装甲が豪雨に降られシールドエネルギーを持って行かれる。

「くっ!」

一撃一撃の威力は大した事無いが、それが豪雨の如く降り注いでくるのだ。

完全に躲す事など、あの千冬ですら難しいだろう

だが弾幕を何とかやり過ごした一夏はそのまま彼女へ向かって行くが……

「……だから言った筈ですわ。全て受け止めて欲しいと!」

次の瞬間、背中に豪雨が降り注いだ。

「ぐっッ!?!?!」

突然の衝撃に落下してしまう一夏だが、すぐに体制を立て直す。

“そういう事か……”

一夏は理解した。

彼女の渴望は“自分の全てを受け止めて貰いたい”と言う霸道である。

つまり、当たるまで追い続ける大量の弾幕

レーザーが拡散して小さな雫のようになったのは、全て受け止めて欲しいものと言う事から

四つでは足りずに表現しきれないと言つ事だ。

その眼は久しぶりの窮地に焦りと楽しみを感じている事で輝いていた。

“ つくづく、自分は戦う事に向いているらしいな……”

自分は戦いの運命に戦わずに生きてゆく事は出来ないらしい

次の瞬間、一夏を包み込むようにして、レーザーの弾幕が襲い掛かった。

その頃、管制室でも騒然としていた。

「レーザーが拡散した!？」

真耶が驚愕の声を上げる。千冬も驚いたような表情をしている。

更に一夏が飛び越して躲す。

するとレーザーの弾幕はとんでもない速度で曲がり、彼の背後から直撃する。

「一夏ッ!！」

篤が思わず声を上げた。

「馬鹿な・・・いくら偏向射撃が理論上可能とはいえ、あの曲がり方
はあり得ん・・・」

「で、では、あれは一体・・・!?」

篝の言葉に千冬も考える。

すると、クラスメイトの声が千冬の耳に入ってくる。

「セシリアさん、凄いね。」

「でも、あの詩って何だろう?」

そこで彼女は思い至る。

「まさか・・・あの詩を詠う事で発動する単一使用能力なのか・・・?」

「そんな!まだ二次移行でも無いのに単一使用能力の発現なんてあ
り得るんですか!?!」

真耶の言葉に、さあな、と千冬は返して続ける。

「ISはまだ謎が多い、あれが何であっても真実は分からない」

そして彼女はモニターに映る弟の姿を見る。

“ どうかやら、目はまだ死んでいない様だな・・・ ”

その表情は凜々しく、見る女、全てを引き寄せる魅力があった。

“自分ですら魅力を感じるのだから” と思い

ちらりと、他の連中に目を向けると・・

箒は頬を紅くして王子様を見る眼をしているし、隣にいる副担任も同じ様な目をしている。

“相変わらず罪作りな奴だ”

千冬はフラグ野郎の弟を見て溜息をつくのだった。

このままでは負けるだろうが、時間的にそろそろだろう

すると、彼を包み込むようにレーザーが全方位から襲い掛かった。

「一夏ッ！！！！」

箒が再び彼の名前を叫ぶ。

逃げる事も防ぐことも不可能な必中の攻撃に包まれた彼は墜ちるのか？

“それでは面白く無いだろう？”

英雄ヒーローとはどんな強敵にも決して負けず、最後に勝利を掴む。

それこそが英雄譚なのだから

織斑千冬はフツと笑って言った。

「機体に救われたな。馬鹿者め」

モニターには白では無く黒に染まりし、騎士の姿があった。

「一次移行！？・・・まさか、今まで初期設定で戦っていたのですか！？」

セシリアが驚いた様子で彼に聞いてくる。

どうあっても、自分は黒騎士である事是否定できない様だ。

そして、その手に展開された武器は姉が使っていた物と同じだ。

「俺は最高の姉を持った。

幼き俺を必死で養い、栄光よりも俺を選んでくれた最愛の姉だ。

あの時に、俺は彼女を支える事を誓った！！

だからこそ、お前を倒す！

見せてやる。この俺を！！！！」

黒き装甲を纏った彼は彼女を本気で倒すことにした。

「……………」

千冬は体を震わせながら涙を流していた。

「…………千冬さん。どうぞ」

「…………すまない」

箒からハンカチを受け取ると溢れてくる涙を拭く

「いい弟さんを持ちましたね」

「ああ、いつも泣き言ひとつ言わずに、グスツ…………私を支えてくれた

…………グスツ…………弟だ…………」

だが、彼女は更に涙を流すことになる。

一夏は詠う、嘗ての渴望とは違う渴望の二つ

E s i s t u n s e r e l i e b e , I c h l i e b e
d i c h , I c h w i l l d i c h u n t e r s t ? t
z e n

―我が愛しき者よ、私は貴方を愛し、貴方を支えたい

D u u n t e r s t ? t z t e s t m i c h l a n g e .

― 貴方は、私を長い間支えてくれた。

D u g a b s t m i r a l l e s , u m m i c h z u
u n t e r s t ? t z e n .

― 貴方は私を支える為に、全てを私に捧げてくれた。

I c h u n t e r s t ? t z e d i c h d i e s e s M a
l .

― 今度は私が貴方を支える番だ。

G i b d i e s e n K ? r p e r , a l l e s ,

― この身を全てを捧げて

W i d m e n w i r s i c h d i r .

― 貴方に尽くそう

― B r i a h

― 創造

I c h g e b e e i g e n e n W e g D i e W e l
t d e s B r u d e r s

― 我捧ぐ・姉弟世界

それは最愛の人の為に出来る事を全て行いたいと言う渴望から生まれし求道

その力は万能化、ありとあらゆる物全てを使いこなす事が出来る能力

「は、はははははは！！素晴らしい！素晴らしいですわ！！一夏さん！！」

初期設定で私を苦戦させただけで無く、

一次移行で単一ワンオフアビリティ使用能力を発現させるとは！

やはり、貴方は最高に素敵ですわ！！さあ、もっとこの円舞曲ワルツを楽しみましょう！！」

セシリアの表情は歓喜に満ちていた。

自分の惚れた男は、これ程までに強さを示し、屈する事無き誇り高さを見せている。

“ならば全力を以ってして、全てを受け止めて下さい！一夏さん！！”

また一夏も熱烈な視線に眼で答える。

“お前の全てを受け止めてやる”

蒼き雫達がセシリアの周囲に集う

セシリア自身もレーザーライフルを構える。

円舞曲の終曲を飾るに相応しい一撃

“さあ、受け止めて下さい！！これが私の全てです！！一夏さん！！”

放たれし全てのレーザーは拡散し、再び収束して一つの極光を生み出す。

それを受け止めるべく一夏も又、正面から突撃して躲す事などしなかった。

“単一使用能力：零落白夜、発動！！”

巨大な極光の奔流の中を一夏は剣で切り裂きながら突き進む

「……………ッおおおおオオオオオッ！！！！！！！！！！」

咆哮を上げながら、スラスターの全開出力で突き進む。

「セシリア・オルコットオ！！」

極光の先に待ち受ける彼女の姿を、その瞳に捉える。

そして極光を突き抜け、所どころが融解した剣を捨て、彼女へ一撃を放つ！！

「これが！織斑一夏だアアアッ！！！！！！！！」

彼の放った拳と、彼女が最後に放ったミサイル

そのどちらが早く到達したのかは、言う必要はないだろう・・・

「何が“これが！織斑一夏だ！！”だ。負けたじゃないか！！」

保健室で箒に看病してもらいながらベッドの上に寝ている一夏

「そうだな・・・」

最後の一撃を放った時、確かに一夏の拳は届いた。

だが最後に放ったセシリアのミサイルの爆風が一夏の拳の狙いを僅かに逸らし

本当にギリギリの差で負けたのだ。

0・1：0の差で・・・

やはりレーザー四発分の直撃を受けたのがいけなかったらしい

「悔しいな……」

「そうか……」

ああ、そうだ。と一夏は言う

「必死で力を求めた癖に、敗北した……それだけなら許せる。

だが、姉さんの同じ力を使っておきながら敗北した。

俺は姉さんにまた恥をかかせた……」

相当、悔しいのだろう。握られた拳の色が変色して白くなっている。

するとそこへ……

「何を言っているか馬鹿者」

「姉さん……」

千冬がやって来た。

「いつも、お前は自分を責める馬鹿者だ。」

「う……」

千冬に責められて、しょんぼりする一夏

だがな……と千冬は言う

「お前が必死で私の為に努力してきたことは知っている。」

「……………」

「だから少しは自分を許してやれ……」

そう言っつて千冬は一夏を抱きしめた。

「……………ありがとう」

「構わないさ、充分すぎる位お前は尽くしてくれた。その礼だと思え」

そのまま一夏は安心したのか、千冬の胸の中で眠ってしまった。

「千冬さん……」

「織斑先生だ……後は頼んだぞ？」

「はい……………」

一夏を箒に託した千冬は保健室から去って行ったのだった。

「一夏……………」

箒は安心したような表情で眠る一夏を撫でながら、思う。

“お前は何時まで経っても千冬さんの事しかないのだな……”

何時か、そこに自分も入って見せると誓った彼女は、

自分も強くならなければと思うのであった。

何処かにある研究室の一室に彼女はいた。

「あはははは！これは凄いね！まさか、これ程の事が出来るなんて！」

ISの開発者、篠ノ之束はディスプレイに映る光景に興奮していた。

「己の渴望を世界へ戦闘用に具現化して、現出させるなんてさ・・・」

非科学的にもほどがあるよね、と束はごちる。

「このセシリアって娘の渴望は、レーザーを拡散と収束まで自在にしているし、」

おまけに追尾性能まで付いちゃってるなんてチートもいいところだよ・・・」

すると、束の背後から影法師の様な男が現れた。

“如何かな？彼女等が演じた歌劇の程は・・・”

「私の予想以上だよ、胡散臭くて最初は信じられなかったけどね・

「・

“ふむ、君がそう評するならば、私が手を加えただけの甲斐があったと言っものだよ”

ニヤリと影は語る。

「でも、この創造って言うのは、誰でも使えるんだよね？」

“然り、君が使いたいと言うのなら、君に与える事も出来るが？”

「ふうん・・・じゃあ、今度頼もつかない・・・」

“では、自分の内に眠る渴望を理解する事だ。それまでは私も舞台裏にいるとしよう”

そう言い残すと影は消えて行った。

「そうだね・・・貴方が出てくるのは舞台の最終章・・・」

そしてその時こそ貴方の願いを叶える時」

“そうだよ、メルクリウス？”

・ 束の、その言葉はどこか暗い闇の中へと消えてゆくのだった・・・

第五話（後書き）

セシリアの創造に使った詩はジョージ・ハーバートの詩

「愛は私を喜んで招き入れてくださった」です。

前回のあとがきで、名前間違えました。

一夏の創造はオリジナルの詩で翻訳サイトを使用しました。
能力はゼロの使い魔のガンダルーヴと同じです。

武器以外にも適応されるといのが違いですが・・・

そして、最後にまさかの二ト登場

ISコアに永劫破壊の術式を仕組んだのもコイツです。

束がISを開発した時期に登場して関わっています。

これからどうなってゆくのか？

それはこれからのお楽しみです。

ではこの辺で・・・

第六話（前書き）

はい、ASTです。ちょっとカプセルガンダムにハマッていました。
遅れてすみません

中国娘の出番は次回にしました。
では、第六話です。どうぞ

第六話

「と、いう訳で一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。・・・あ、「一」繋がりでいいですね」

試合の翌日、朝のホームルームで真耶がそう言った途端

教室中から歓声が沸き起こった。

第六話

「・・・何故だ？」

不思議そうに一夏が真耶に聞く

自分の記憶が正しければ決闘に勝った方が代表になるという事だった筈である。

「それはですね「それは私が辞退したからですわ!!」・・・うう」

答えようとしたら、その上から勢い良くセシリアが答えたので、涙目になる真耶

「勝負は確かに貴方の負けでしたが、私とほぼ引き分けの僅差に

持ち込んだのですから・・・」

セシリアは咳払いを一つしてから続ける。

「それで、私も大人気無かったと反省しましたので・・・」

彼女は一夏にっこり笑いかけると

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。

IS初心者であれ程の実力ですのでクラス代表になって実験経験を
積み重ねていけば、

国家代表も夢ではないと思いますの」

そこでセシリアは頬を少し赤く染めながら一夏を見て言う

「そ、それですわね・・・私のような優秀かつエレガント、華麗に
してパーフェクトな人間が操縦を教えれば、それはもうみるみる内
に成長を遂げて――」

「生憎だが一夏との訓練相手は私だ。」

そこで箒が立ち上がり、セシリアを睨んで牽制する。

どうやら乙女の勳が、彼女を明確なライバルだと認識したらしい

しかし彼女も怯む事無く、箒を余裕の目で見る。

「あら、誰かと思えばISランクCの篠ノ之さんでは無いですか。

ランクAの私に何か御用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 一夏の相手は私だ。一夏にどうしても頼まれたからな・・・」

実際は一夏がどうしようか・・・と考えていると彼女と一緒に訓練してやろうと半ば強引に誘った結果である。

一夏自身も訓練用ISが無いから、筭の誘いに付き合ったのだ。

それは良いとして、二人の頭からバシン！バシン！と打撃音が響き渡った。

出席簿を片手に現れた千冬が、頭を抑えて悶絶する二人に言う

「座れ、馬鹿共」

そして、彼女は言う

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしてみれば団栗の背比べだ。まだ殻も破れていない段階で優劣など付けようとするな。」

千冬
コイツみたいな規格外ランクの奴でもだ。と、一夏を指して言う

ちなみに一夏のランクは規格外のSSである。

これは千冬のSランクを超えて、計測不能レベルの適正值に暫定的につけたランクである。

つまり一夏は世界一の適正值を持っているのである。

「代表候補生でも一から勉強してもらうつと前に言っただろう。」

下らん揉め事は十代の思春期の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

厳しく表情を引き締めて言う千冬に一夏は

「流石だな・・・これで私生活もしっかりしていれば良いのだが・・・」

そんな事を考えていると、千冬がこちらを向いた。

「織斑、今何か無礼なことを考えただろうか？」

ギロリと睨んでくるが、一夏は平然としていた。

「・・・完璧な存在など、この世界に在りはしないと考えただけです。」

相変わらず、ぎこちない敬語だった。

「そうか・・・」

ズバン！！

「すみませんでした。」

「分かれば良い」

千冬はフン、と鼻を鳴らしてから宣言するよつに言う

「クラス代表は織斑一夏。依存は無いな？」

ここに一夏がクラス代表であるが決まったのだった・・・

その後、ISを装着する為に一組の生徒全員がISスーツを着てグ
ラウンドに居た。

ISスーツは簡単に言えばスクール水着に似ている為、健康的な太
腿とか見事に露出しており、男である一夏の視線を気にして恥ずか
しがっている者も居たが・・・

当の一夏本人は腕を組んで立っているだけで、女の肌に興味は無い
とばかりに無関心だった。

その様子に残念そうにしている一部のクラスメイトが居たのだっ
た。

「それでは、ISの飛行訓練を開始する。織斑、オルコット、I
Sを展開しろ」

一夏は待機状態にある己のISに目をやる。それは黒きガントレ
ットであり

その外見は『人世界・終焉変生』だった。

“本当に、これも何かの縁か……”

「何を呆けている？ 早く展開しろ」

ふと気づくとセシリアは既に展開している。

千冬に急かされた一夏は腰に腕を置いて肘を横に突き出す。それは押忍！の格好に近い

「—— Yetzirah」

次の瞬間には黒い装甲を纏った一夏がそこに居た。

「よし、飛べ」

その言葉と共に砲弾の如き速度で上空に飛び上がる一夏、それに続いてセシリアも優雅に飛んでいる。

ある程度の高さまで上昇すると一夏は宙返りして待機する。

「流石ですわ、一夏さん。」

何処か嬉しそうにセシリアが話しかけてくる。

「いや、それ程でもない……」

素っ気無く返したのだが、その会話を快く思わない者がいた。

「では、今度二人きりで一緒に訓練を」一夏、何時までそんなとこ

ろにいる！早く降りて来い！！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、地上に目をやると
箒が真耶からインカムを奪っていた。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地
表から十センチだ。」

千冬が箒に拳骨を振り下ろして言う

「了解しました。では一夏さん、お先に。」

そう言ってセシリアは一気に加速して急降下し、一気に減速して完
全停止をしてクリアした。

“流石は代表候補生と言った所か”

そう思いつつ、一夏も急降下を開始する。

急速度で地上へと降下して行く、そして地表ギリギリで轟音と共に
止まる。

「・・・確かにクリアはしたが、その方法は止める」

千冬が言ったのは、地表寸前で一夏は一気に拳を突き出し拳圧で速
度を相殺したのだ。

普通の人間が出来る事ではない。一夏だから出来るのだ。

「まあ、良い・・・次は武装展開だ。」

千冬が一夏の前に立つ

「では、やってみる」

一夏は何も言わず、ただ無言で拳を前に突き出し雪片式型を展開する。

「これ位は問題無いか・次はオルコットだ。」

「はい」

セシリアは真横に左腕を肩の高さまで上げる。

「ふむ、流石は代表候補生と言った所か・ただしオルコット、そのポーズは止める

誰を撃つつもりなんだ？」

「で、ですが、これは私のイメージにまとめるのに必要な――」

「直せ、いいな」

「はい・・・」

流石のセシリアも千冬には逆らえず、ただ返事をするしかない様だった。

「次だ。オルコット、近接武装を出せ」

「は、はい」

返事をしたものの、中々で展開されない

「まだか？」

「い、いえ……。うん……。ああ！もう、“インターセプター”……！」

うまくイメージ出来ない事に痺れを切らしたセシリアは、初心者コースのやり方でショートブレードを展開した。

これは代表候補生たるセシリアにとっては屈辱だろう。

「何秒待たしている。実戦で相手は待つてくれないぞ？」

「……頑張ります。」

「分かれば宜しい」

この様に本日の授業は行われたのだった。

夕食後の自由時間、一年一組のクラスメイト達による『織斑一夏、クラス代表就任記念パーティー』が開かれていた。

「と言うわけで！織斑君クラス代表おめでとう！」

「「「「「おめでとう~~~~!!!!!!」」」」」

「……………ああ」

一夏はパーティーの中心で、クラスメイト達から次々と祝いの言葉を送られていた。

いつもの如く、ぶっきらぼうな返答に無表情といった様子だが、彼女達の気持ちを無下には出来ないらしく、ちゃんと会話に付き合っている。

その様子を見て、箒は不機嫌そうに茶を飲んでいる。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしてみました〜!!」

オオと盛り上がる一同、学生だけあってノリが良い様だ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってます。ハイ、これ名刺」

「……………どうも」

「ではでは、ずばり織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ!!」

「……………特に無い」

「え〜、もっと良いコメント頂戴よろ?案ずるな、私は負けん!!とか」

お前はどごぞの黄金的な台詞を求めんのかよ!?!と突っ込みたいが気にしないで置こう

「夏はマキナだ。マキナがそんな事を言うなんて無理にも程がある。」

「・・・言葉で飾る必要など無い」

「おお・・・ハードボイルド・・・」

「夏は言葉では無く、行動と背中でする漢なのだ。」

「じゃあ、仕方無いから適当に捏造しておくから良いとして・・・セシリアちゃんも何かコメントを」

「私、こういったコメントはあまり得意ではないのですが・・・」

そう言いながらも、満更じゃなさそうにしているセシリア

「では、まずどうして一夏さんに代表を譲ったのかと言うと――」

「あ、長そうだから、写真だけで良いわ。」

「ちよっ!?!?」

「クラス代表を譲った理由も、織斑君に惚れたからでいいよね?」

「なっ!?!? ななな・・・」

セシリアが真っ赤になってプシュ〜と蒸気を吹き上げる。

「ああ、織斑君、セシリアちゃんとのツーショットが欲しいから並んで?」

“まさか、筈までもが一緒になって入ってくるとは……”

獣殿もびっくりのチームワークである。

「あ、貴方達ねえ!!」

「セシリアだけ駆け抜けはしないでしょう?」

「ま〜ま〜」

「クラス全員の思い出になっていいじゃん」

「わ〜い、おりむ〜に、いのっちと写真〜」

「先輩、後でその写真くださいね!!」

“全く、子供だな……”

一夏はそんな事を思いながら彼女達の見ていたのだった。

その後、セシリアの肩を抱いたことに対する筈の嫉妬に、頬へキスすることで落ち着いた。

が、ズルイと言うセシリアを含めたクラスの声に

一夏は仕方なくクラス全員の頬にキスする事になったのだった……

結局この馬鹿騒ぎは夜十時まで続けられ

その間に一夏は数え切れない位、クラスメイトの頬や額にキスをしたのだった・・・

流石に“唇にしてくれ”と言う者は、同じ乙女達によって阻止されたが・・・

それでも皆、その日はとても満足そうにしていたのだった・・・

第六話（後書き）

はい、一夏君の鈍感振りと父親的スキルの発動です。

すごいですね一夏、クラスメイト全員に唇ではないとは言え、何度もキスしてます。しかし、一夏自身は家族や友達に対するスキンシップの様なものと考えているので、性質が悪いです。

設定集（前書き）

これまでの設定集です。

設定集

ふむ、この舞台裏を見に来るとは、君も中々に奇特な・・・いや、知識欲が旺盛な人間なのかな？

・まあ良い、大したもてなしは出来ないが、ここを見に来たのだから、精々楽しんでくれたまえよ・・・フフフ・・・

・織斑 一夏

前世はDies iraeの聖槍十三騎士団・黒円卓第七位ゲッツ・フォン・ベルリツヒンゲン

通称マキナと呼ばれていた英雄ミハエル・ヴィットマン

腐れ二トことカール・クラフト：メルクリウスとの戦いで何の偶然か円環から弾き出されて、気が付けば織斑一夏として生まれていった。

性格は前世のまま、寡黙でぶっきらぼうに話す。

織斑一夏という存在の影響を受けており、困っている人を見捨てることはしない

言葉にせず行動で表す人間、背中で語るハードボイルド、しかしシスコン。

前世の影響か、人間離れた身体能力を誇る。

剣道も天童と称されるほどの腕前だが千冬には及ばない

素手での格闘においては比類なき強さを誇る

剣道も手加減しきれない格闘の代わりに学び始めたもの、素手でコンクリートを砕き、鉄骨を折り曲げる。

千冬を支える為に生まれた時から自分に出来ることを必死でやってきた。

第二回モンド・グロツソで誘拐され、千冬が決勝戦を棄権して助け

に来てくれた事は

彼にとつて最大の忌まわしい記憶である。

元々養つてくれていた事に感謝していた一夏は、この事件がきっかけで千冬への想いや感謝が増し、シスコン度が増した。

学校でもハードボイルドな雰囲気から友人は少なかったが、無自覚にフラグを立てる。途轍もなくモテる。

一部では同性愛者か、不能か、とまで言われる程、色恋に興味が無い実際には色恋に興味が無い訳では無いが、千冬優先の為に構っている暇は無いのが実情である。

千冬に対する感情は、殆ど感謝、恩義、罪悪感、といったものだと思っているが、恋愛感情も多少含まれている。

専用ISは白式

・白式

一夏のISだが、どうもニートが余計なお節介をしてくれたおかげで、外見が一次移行の際に黒く染まり、本来と単一使用能力が変わっている。

単一使用能力は零落白夜なのだが、一夏曰くこれは不完全な単一使用能力の発現らしい

一夏自身はこれを両腕部分のみを部分展開して使うことがある。

更に量子化の応用による禁断の技があるがリスクが伴う

創造は“Ich gebe eigen Weg Die Welt des Bruders 我捧ぐ・姉弟世界”

これは一夏の渴望の一つである“最愛の人の為に出来る事を全て行いたい”と言う渴望から生まれた創造である。

効果はあらゆる物を使いこなす事が出来る様になる。それが武器であるうと、楽器であるうと、器具であるうと達人級の技量で行える。

意外と実用性は高く、日常生活にはもってこいの能力、種類は求道型。

・篠ノ之 篤

設定は原作と変わりないが、幼い頃の一夏の行動から新密度や愛情は高い、姉の束がISを開発した事で家族が散り散りになり、一種の呪いの様な物だと感じている。

別れる際に掛けられた言葉で一夏に対しての想いは常に烈火の如く燃え続けていた。

素直になりにくい幼馴染系クールツンデレ

幼い頃に一夏から慰めのキスを貰い、それ以来事ある毎に頬や額にキスして貰ったり

綺麗になつたと褒められたりと、意外といいポジションにいる。

同年代のヒロインの中では好感度が一番高い

一夏に裸を見られたり、押し倒されたりと何かしらの18禁的ハプニングに見舞われる。

・セシリア・オルコット

設定は原作と変わらず、幼少期の体験から人を見下す事がある。プライドが高く、金髪縦ロールの髪型と、正にお嬢様キャラの一つを体現した存在

男である一夏を見下し、対立して決闘を行う事になり、戦いの最中に一夏の誇りや心の強さに惚れる。

イギリスのIS国家代表候補生であり、学年の中ではトップクラスの技量を誇る。

・ブルー・ティアーズ

セシリアの専用ISであり、第三世代型のISである。特殊遠隔実験兵装“ブルー・ティアーズ”を六基搭載しており、実験機としての割合が強い

タイプの後方支援機であり、射撃に特化している為、接近戦となるとショートブレードの“インターセプター”しか無いので苦戦す

る。

ISのコアにメルクリウスが簡易版エイヴィヒカイトを仕込んだために、創造が発動可能

創造は

“ Seren golau dydd teimlad syrt
hiomewncariad 星光降り注ぐ、恋慕心情”

これは彼女の渴望である“自分の全てを受け止めて貰いたい”という渴望をから生まれた創造である。

効果はレーザーを雨粒の様に拡散させたり、収束させて一つの巨大なレーザーにしたり出来る。更にレーザーは相手に当たるまで追尾し続ける。

欠点としてはレーザーの燃費が酷くなり、二十発程でエネルギーが切れてしまう点である。種類は霸道型

・織斑千冬

織斑一夏の実の姉であり、世界初のIS操縦者でもある。ISの開発者、篠ノ之束とは幼馴染の親友である。

ISの世界大会、第一回モンド・グロツソ優勝者であり『ブリュンヒルデ』の称号を持つが本人はその名で呼ばれる事を嫌っている。高校生の時に親が蒸発した為、幼い一夏を学生の身で育てた苦労人である。結構ブラコンが入っている。

性格はクールで凛々しく、即決即断と言う行動方針であり軍人に近いが、心優しい一面も見せる。

能力が総じて高く、あらゆる事に対しての才能に恵まれていた。しかし家事関連の事は全く駄目である。

IS学園の教師をしており、厳格な鬼教官であるが、私生活はだらし無い

設定集（後書き）

キャラクターの設定や説明が出来次第、追加していきます。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（前書き）

はい、思いつきで書いてみました。

上手く獣殿ことハイドリヒ卿を書けているか不安です。

これは小説本編とは関係ありません。

あくまで、もしもの物語です。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・

「織斑一夏だ。よろしく頼むぞ。麗しき乙女達よ」

IS学園に入学したのは、日本人でありながら黄金の瞳に鬘の様な長髪を持つ男だった。

その容姿は正に人体の黄金律と呼ぶにも、芸術品と呼ぶのにも相応しかった。

人間は本当に感動すると何も言えなくなるらしい・・・

外伝・もし一夏が獣殿だったら・・・

「久しぶりだな、篝。六年振りか・・・」

「ああ・・・貴方は相変わらずだな」

「ふっ・・・人はそう易々と変わりはせんよ」

「その口調も変わらないな・・・」

「ああ、だが卿は美しく成長した。そう、幼かった蕾が花開く様な」

「そ、そうか・・・」

「うむ、卿と語り合う事は多いだろうが、この時間で語り尽くせるものでは無かるう?」

黄金はかつて別れた第一の幼馴染と再会する。

「決闘ですわ!!!」

「良かるう、代表候補生たる卿の力を見せて貰おうか」

黄金は、英国の令嬢との決闘に挑む

「愛せよ『破壊の君』」
ハガルクオーツ

黄金は嘗ての神槍を鎧として身に纏う

「な、何故、私の攻撃が通用しないんですの!!!?」

「愛が足りんよ、セシリア・オルコット」

超然とした笑みを浮かべ、黄金は不動の構えをとる。

「では、卿を愛そう」—— Y e t z i r a h 「

彼の手に黄金の神槍が現れる。

蒼き雫を身に纏う令嬢は黄金の愛を知る事になる。

「久しぶりね、一夏!」

「そうだな、鈴よ。」

第二の幼馴染と再会する黄金

「その・・・私との約束を覚えてる?」

「ああ、卿との盟約は忘れもしない」

「じゃ、じゃあ・・・その・・・」

「甘いな、鈴よ・・・卿は私の愛は知っているが、私は卿の愛は知らん」

黄金に愛の深さを試される鈴

「よく、見ておきなさい一夏、これが私の愛よ!」

「ふむ、悪くは無いが・・・愛が足りんよ、鈴」

鈴の愛は黄金の心を射止めるには届かなかった。

「僕はどうする事も出来ないんだ・・・」

「卿はそれでいいのかね？」

黄金は貴公子の姫君に問う

「僕は貴方みたいに強くなんて無い・・・」

「ならば、頼れば良からう？」

「でも、僕の話聞いてくれる人なんて・・・」

「私は総てを愛していると言った。ならば卿も例外などでは無い」

「僕の言葉を・・・聞いてくれるの・・・？」

「その通りだ。さあ、卿の想いを吐き出すが良い」

「嫌だ・・・嫌だよ・・・諦めたくないよ・・・」

まだ、やっていない事だつて、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて・・・

そんなの嫌だよ・・・助けて・・・助けてよ、一夏!!!」

「任せる・・・卿を救って見せよう」

そして姫君は黄金の手を取る。

「お久しぶりです。獣殿！」

「ああ、卿も健勝そうで何よりだ。」

黄金は、己に忠誠を誓う銀の髪に黄金の片目を持つ旧友と再会する。

「ほう・・・姉上を模す・・・か、卿が望んだ強さとは本当にこれか
ね？」

「
真に己の渴望を見つけられなかったか・・・ならば、私の愛で卿
の道を照らそう」

空虚な力に支配された彼女を黄金が破壊する。

「強さとは、一体何なのでしょう？」

「それは私や姉上が見つける事では無い、力は単なる力に過ぎんよ。何の為に卿は戦う？」

「分かりません・・・教官の様になりたいと思って、力を求めています。」

「では、もう一度考えてみる事だ。何のために力を求め、戦うのか？・・・幸い、時間は沢山ある。」

力の意味を銀の少女は模索する。

「貴方を私の嫁にしてみせる！」

「はははははは！良かろう、卿の愛を私に見せてくれ」

銀の少女は黄金と共に在ろうとする。

臨海学校、照り輝く太陽の元、海で戯れる少女たちの瞳に、黄金の裸身が写る。

「うむ、海水浴など初めてだ。海は未知で溢れ返っている。」

「くっ、カールよ、ここで卿を感じるとは・・・」

力に慢心していた第一の幼馴染は、水銀の手が加わりし舞台上で暴君を演じてしまう

そして黄金は墜ちる。

「久しぶりだな、カールよ・・・」

「ええ、獣殿も変わり無き様で・・・」

「何故、卿はまた永劫破壊を？ここに円環は無いが・・・」

「獣殿、私の願いを聞き入れてくれはしませんか？」

そこで黄金は水銀の願いを知る。

「さて、私も挑ませて貰おうか・・・」

福音に挑むは新たな力を手にした黄金

「我が速度についてこれるか!？」

総てを追い越す速度で福音へと槍を振るう黄金

「ふむ、メイド喫茶か・・・面白い」

「フオオオオオオオツ！！！！？」

着なくても良いのに態々、執事服を着る黄金

「良くぞ、戻って来てくれたな。主よ」

執事なのに偉そうな黄金

「さて・・・卿等は私を怒らせた・・・」

「ハア？何言つてやがん——ガアツ！！！！？」

黄金から放たれる殺意は余りにも圧倒的で凄まじい・・・彼等は黄金の逆鱗に触れてしまったのだ。

「私はM、そして織斑マドカだ・・・」

「卿は・・・」

戦奴として生きるしかない姉のクローンと黄金は出会う

そして、黄金と水銀は雌雄を決する。

「ふっ、カールよ、今こそ盟約を果たそうではないか・・・」

「そうだな・・・ハイドリヒ・・・いや、織斑一夏」

総軍を率いる黄金、そこに集うは戦奴としてでは無く、肩を並べ信頼する戦友として集った者達

「行くぞ、卿等の渴望を叩き返してやれ！・・・案ずるな私は負けん！！」

Dies irae, dies illa, solvet
aecclum in favilla. Teste David
cum Sybilla.

怒りの日 終末の時 天地万物は灰燼と化し、ダビデとシビ
ラの予言のごとくに碎け散る

Et arma et verba vulnerant Et
arma

武器も言葉も傷つける

Quantus tremor est futurus, Qu
ando judex est venturus, Cunct
a stricte discussurus.

たとえどれほど大きな戦慄が待ち構えていようとも 審判者

が来たり、厳しく糾され 一つ余さず燃え去り消える

Fortuna amicos conciliat inopi
amicos probat Exempla

—— 順境は友を与えるだろう 欠乏は友を試し絆を高める事だろう

Tube, mirum spargens sonum Per
sepulcrare regionum, Cogit omne
s ante thronum.

—— 我が総軍に響き渡れ 妙なる調べ 開戦の号砲よ 皆すべからく 玉座の下に集つべし

Levis est fortuna id cito reposit
scit quod dedit

—— 運命とは軽薄である 与えたものをすぐに悉く裏切るが如く返すよう求める。

Lacrimosa dies illa, Quaresur
get ex favilla

—— 彼の日 涙と罪の裁きを 卿ら 灰より 蘇らん

Non solum fortuna ipsa est cae
casseditiam eos caecos facit
quos semper adjuvat

—— 運命はそれ自身が盲目であるだけでなく 常に助ける者 救われる者達をも盲目にする

Judicandus homo reus Huic ergo
parce, Deus.

—— されば天主よ その時彼らを許したまえ

Misc estultitiam consiliis bre
vem dulcē est desipere in loco
しい
僅かの愚かさも思慮に混ぜよ 時に理性を失え それが望ま

Pie Jesu Domine , dona eis requ
iem . Amen .
慈悲深き者よ 今永遠の死を与える エイメン

Ede bibede post mortem null
a voluptas
食べる 飲め 遊べ 死後に快樂はないのだから

「 Atziluth
流出

Du-sollst Dies irae
混沌より溢れよ怒りの日

Acta est fabula
未知の結末を見る

これはラインハルト・ハイドリヒが織斑一夏として生まれた人生を
描いた英雄譚である。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（後書き）

さて、次回を書くのは何時になるのやら・・・

まあ、気力がドバァツと湧いてきたら、一気に書きます。

特に感想を書いたり、評価をしてくると、気力ゲージが貯まりやすくなります。（ゲームかよ・・・）

うん、鈴の渴望は出来上がってますし、創造の効果も考えてあります。

原作と似たような効果です。

ただ、シャルの詠唱にピツタリな詩は見つかりましたし、渴望もあるんですが・・・

その渴望から、どのような戦闘能力に変換すればいいか考え込んでいます。

第七話（前書き）

はい、徹夜で書きました。

明日も大学なのにねえ・・・

でも、読者の期待に応え、感想を貰うべく、俺は書く！！

という事で今回、中国娘の登場です。

第七話

パーティーの翌日、一組の教室では噂が広まっていた。

その事について、隣の席の谷本癒子が一夏に聞く

「ねえ、織斑君は転校生の話、聞いた？」

「いや、知らん・・・」

第七話

「何でも、中国の代表候補生が二組に転入して来て、クラス代表になっただけなんだって」

「そうか」

「あら、私の存在を危ぶんでの転入かしら」

相変わらず自身満々にポーズを決めて言うセシリア

もしISが無い世界であったならば、彼女は女優になっていたのだろうか？

“中国か・・・まさか、な・・・”

「む、やはり気になるのか？」

「一応、戦う相手ともなれば、少しは気にもなる。」

「・・・むう」

不機嫌そうに複雑な表情になる筈

「来月にはクラス対抗戦だ。それまでに相手を知る事に損は無い」

「それよりも私と二人きりの訓練に付き合ってもらえませんか？
あれのうまく発動させられる様になりたいんです。」

確かにセシリアの言うとおりだった。

彼女はあれ以来、創造を上手く発動し切れていない

何故なら渴望を強靱な意志で維持しなければならぬからだ。

創造は、どれだけ強く渴望し続けていられるかと言う事が決め手となる。

簡易術式である為、創造を発動し維持するには強靱な意志で渴望を支える必要がある。

故に集中を切らしてしまうと即座に解除され、それまで麻痺していた疲労が一気に襲ってくるのだ。

故に嘗ては必殺技だった創造も、使い所を誤れば逆に敗北してしまうことも有り得る。

しかも彼女の創造は霸道型である為に効果空間内にいる者達の影響を受ける為、求道型よりも強靱な意志を持って自分の渴望を維持しなければならぬのだ。

創造について、千冬達に問い詰められたが一夏は束が仕込んだシステムだと説明した。

「今の所、展開時間が20秒前後、箒を加えると12秒が限界か・・・」

「はい・・・ですから、一夏さんのご教授を」

セシリアが一夏に聞くが

「生憎だが、お前は霸道型の創造だ。俺の求道型とは違う」

「霸道型？」

不思議そうに聞いてくるセシリアに説明をする。

「霸道型は周囲を変える物だ。多数を相手に向くが、渴望を強固に維持している必要がある。」

「求道型の方は何なんだ？」

箒も気になる様だった。

「求道型は自分を変化させる創造だ。一対一に向いている。渴望も自分のみに向けられるために霸道型よりは維持しやすい」

「では、求道型の方が良いのか？」

「いや、そういう訳でも無い・要は使い方だ。」

そう言っつて、簡潔に纏める一夏

「織斑君、頑張っつてね！」

「フリーパスの為にも！！」

クラスメイト達も応援してくれるのは良いが、少しは欲望を隠したらどうか？と思う一夏

「今の所、専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だよ。」

クラスメイトの鷹月静寂がそう言っつた直後に

「その情報、古いよ」

教室の入り口から聞こえてきた声に全員が眼をやると

先程思い出していた小柄なツインテールの少女が、そこに立っつていた。

「二組のクラス代表も専用機持ちになっつたの、そう簡単には優勝出来ないから！」

「お前・・・鈴か？」

「一夏は何と云うご都合主義の展開か・・・と思いながらも、久しぶりの友に話しかける。」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たって訳」
「ビシィ！」と指を指してきた彼女を見て、一夏は・・・

「・・・似合わんぞ」

「んなっ！？何てこと言うのよ、アンタは！！！」

いきり立つ彼女の後頭部から、ゴスツと言う音がした。

「痛あく、何すんの・・・ふえ！？」

彼女が振りかえれば、千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だぞ？」

「ち、千冬さん・・・」

流石の彼女も千冬の登場にたじろぐ

「織斑先生だ。早く行け、馬鹿者」

「す、すみません・・・また後で来るからね！逃げないでよね、一夏
！！！」

そう言っつて自分のクラスに戻つてゆく鈴

“まさか、代表候補生になつてゐるとは……”

二年前に別れた彼女からは想像も出来ない事だつた。

午前中の授業が終わつた後、昼食を食べる為に鈴と共に食堂に来ていた。

一夏は日替わり定食、鈴はラーメンを食べていた。

「しかし、驚いたぞ。お前が二組の転入生で代表候補生になつてゐるとはな」

「こつちだつてテレビ見て吃驚したわよ。なんでIS動かして、ここに居るのよ？」

「会場間違えて、触つたら起動した。」

「何それ……あいつ等は騒がなかつた？」

「ああ、騒いだ。」

思い出すのは自分を慕い、兄貴と呼んでくれた中学時代の舎弟達の事だ。

彼等は一夏の為なら何でもすると言つていた彼等は、マスコミの取

材を交代交代でシャットアウトしてくれていた。

劣ってやったら“兄貴にそう言っただけなら何でもしますぜ”と言っただけ切っていた。

彼等の事は後に語るとして・・・

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが？」

「そうですね、一夏さん。もしかして、此方の方と・・・っ、付き合っただけじゃないですか!？」

テーブルを叩いて、箒とセシリアが厳しい表情で問い詰めてくる。

「べ、べべべ別に私は・・・」

「違う、二人目の幼馴染だ。」

慌てふためく鈴の代わりに、至極冷静に一夏は言った。

「二人目・・・？」

「お前が小学4年まで、鈴が小学5年から中学2年までだ。」

箒に説明する一夏、その様子を見て鈴は溜息をついた。

「はぁ・・・アンタは相変わらずのハードボイルドね。」

「む?・・・彼女が箒、前に話した道場の娘だ。」

「ふうん、そうなんだ・・・」

鈴は箒を見定める様にジロジロと見る。負けじと箒も見返している。鈴の視線が彼女の一部に来た時、一瞬だけ頬が引き攣った気がしたが気にしないで置く

「初めまして。これから宜しくね。」

「ああ、此方こそ・・・」

お互いの背後に相對する龍虎が見えるのは気のせいだろうか？

「んんっ！私の事も忘れて貰っては困りますわ。」

私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ。」

「ごめん、アタシ・・・他の代表に興味ないから」

「なッ!？」

そう言つて一夏の方を向く、鈴

「ねえ、アタシがISの操縦見てあげようか？」

「一夏と訓練するのは私の役目だ!!!」

「そうですね！貴方は二組でしょう!?!敵の施しは受けませんわ」

「アタシは一夏と話をしてんの、部外者は引ッ込んでよ」

「むう………」

不敵に微笑む鈴と彼女を睨む箒とセシリア

「貴方こそ、後から出てきて何を仰ってますの!？」

「後からじゃ無いんだけどね。アタシの方が付き合い長いんだし」

「それを言うなら、私の方が早い!！」

お互いに牽制しあう乙女達、その様子を興味深そうに見ている生徒達

そして修羅場の真っ只中にいる一夏は……

「……ふう」

のんびりと茶を飲んでいた。

「「一夏さん!！」」

「………?」

怒ったように箒とセシリアが一夏に迫る。

が、当の一夏はそんな事構わずに鈴を見る。

「お前の父親は元気か？」

「う、うん、元気……だと、思う」

「……………そうか」

どこか暗い調子で返した鈴に何かあったと察する一夏

そこで昼休み終了のチャイムが鳴る。

「じゃ、じゃあね、一夏。また後で」

「ああ……………」

何か誤魔化すような様子で去って行く鈴

それを見て、一夏は

“一度、話を聞く必要があるか……………”

またお父さんの事を思うのだった。

放課後、第三アリーナでは一夏が箒とセシリア相手に訓練していた。

「ハアアアアツ!!」

やっとISの使用申請が通った箒は打鉄を纏って、一夏に切りかかっていた。

「ふん！」

ガギーン！と彼女の持つブレードを雪片式型で受け止める。

「そこっ！！」

そこへセシリアがレーザーライフルを撃ちこんでくるが

「っ！！」

「ぐうっ！？」

筈を凄まじい脚力で蹴り飛ばし、一回転して剣でレーザーを切り裂く

「まだまだ甘いぞ・来い、セシリア」

「はい！」

一夏と距離を置き、攻撃を躲しながら詠唱をするセシリア。

筈もすぐに持ち直し一夏をセシリアに近づけまいとする。

—— Creu —— 創造

S e r e n g o l a u d y d d t e i m l a d s y r t h
i o m e w n c a r i a d —— 星光降り注ぐ、恋慕心情

異空間が展開され、雨粒の如き弾幕が一夏に襲い掛かるが

「おおおオオオっ！！」

零落白夜を使用して弾幕を薙ぎ払い、彼女への道を切り開く一夏

そこへ箒が切りかかってくる。

「ハアアアッ！！」

「くっ・・・」

「まだですわよ！」

消し切れ無かったレーザーの雨粒が四方八方から襲い掛かる。

が、一夏の寸前でレーザーが霧散した。

すると一夏は一旦訓練を止めて、セシリアに近寄る。

「・・・25秒、記録更新だな。」

「はあ、はあ・・・そうですか・・・まだまだの様ですわね・・・」

「ああ、だが箒も加えた状態では大幅に長持ちしている。」

「そう言って頂けると、幸いですわ・・・」

喋るのも億劫なのか、荒く息を吐きながらへたり込むセシリア

「今日はここまでだ。箒も良いな？」

「・・・私はまだ行けるぞ」

遊び足りないような子供の様な表情をする箒に一夏は言う

「創造を加えた訓練は相当消耗する。ある程度の余裕を持たんと明日に響く」

あの弾幕を躲すのに箒も一夏と同じ様に挑んでみたが、かなり複雑かつ高速の機動で回避しないといけないので、見た目以上に体力を消耗するのである。

創造を展開するならば尚更だ。

「セシリア、立てるか？」

「ええ・・・何とか・・・」

一夏は彼女の手を取って立ち上がらせる。

すると、一夏は二人を抱え上げた。

「な、何をする!?!」

「い、一夏さん!?!」

二人が驚いた様に声を上げるが、一夏は気にも留めない

二人は一夏の腕を椅子代わりに、彼の首に腕を回している状況だ。

「余り無理をするな。箒も結構、疲れているだろう?」

「だからと言って、この体制は・・・」

篤が最後まで言わなかったのは、脳内軍師モツピーが何か助言したからだろう・・・

「一夏さん。その・・・重くないですか？」

ゼシリアの質問は、乙女にとって結構気になる質問である。

ここで原作の一夏なら、二人を比べたりして失礼な事を言ったりするだろうが

この一夏はそんな真似はしない

「大した事は無い・・・」

そう言ってマキナ一夏はアリーナから彼女等を抱えたまま出て行くのだった。

二人を反対側のピットに運んだ後、一夏は自分が出てきたピットに戻って来ていた。

そこへ鈴がタオルとペットボトルを持ってやって来た。

「お疲れ、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「ああ、待っていたのか？」

「えへへ、まあね・・・」

どこか嬉しそくに答える鈴からタオルを受け取り、汗を拭う一夏

「ね、ねえ、一夏。」

「何だ？」

「やっぱり、アタシがいないと寂しかった？」

「……そうだな」

「や、やっぱり、一夏はアタシが居ないとダメみたいね！」

何か凄く嬉しそうな顔をして言う鈴

だが、どこか空虚さや寂しさを感じさせる何かがあった。

「……鈴」

「何？いち——ッ！！？」

突然、一夏に抱き寄せられた鈴は一気に顔が真っ赤になる。

「iiiiiiiiii、一夏！？」

混乱する鈴に一夏は語りかける。

「何があつた？」

「ッ！？…な、何を」

彼女の体が強張り震えた声で一夏に返す。

一夏は鈴を優しく抱きしめると、耳元で囁く様に言った。

「無理をするな．．お前に何があったのかは知らん。だが、お前は一人じゃない」

「い、いちかあ．．．」

そのまま鈴は一夏の胸の中で泣き出す。

一夏は胸の中の彼女が泣き止むまで、優しく撫で続けていたのだ。た．．

「ごめんね、一夏。カツコ悪い所、見せちゃったね．．」

「気にするな。お前が笑顔になるなら構わん」

「一夏．．．」

ある程度、泣いて落ち着いた鈴は様々な事を一夏に話してくれた。

両親が些細な事で喧嘩して離婚し、母親の方へと引き取られた事

寂しさを紛らわす為に必死で努力して代表候補生になった事

「鈴、別れる前に俺が言った事を覚えているか？」

「うん、覚えてる。」

“例え別れる事になっても、お前がまた会いたいと願えば、いつかまた会える。”

彼女との別れる時に言った一夏の言葉である。

「私ね、あの言葉があったから今まで頑張ってこれたんだよ……？」

「そうか……」

「うん、そうして一夏とまた会えた。」

「ああ……」

すると、鈴は一夏に抱きついて来た。

「会いたかった……会いたかったよ、いちかあ……」

「鈴……」

そんな彼女を一夏は抱き返すのだった……

「俺は部屋に戻る。また明日だ。」

「うん・・・そういえばさ」

「何だ？」

「一夏は誰かと一緒の部屋なの？」

その質問が引き金となってしまった。

「ああ、筈とだ。」

「それって、どついう事・・・？」

先程のしおらしさは何処へ行ったのやら・・・

妙に冷たく低い声で聞いてくる鈴の眼はハイライトが消えていた。

一夏は事情を説明した。

「ねえ・・・それって、あの子と寝食を共にしているって事？」

「そつだ、幼馴染と同室で助かった。」

俯いた鈴からは何か黒いオーラの様な物が出ており、ブツブツと何か呟いている。

「—————つたら、いいわけね・・・」

「何だ？」

「だから！幼馴染だったら良い訳ね！！？」

「ッ!？」

凄まじい鈴の気迫に思わず、一歩下がってしまう一夏

“この俺を退かせるとは……”

女とは時に神すらも超える恐ろしさを発揮するのだ。

「一夏!！」

「……何だ？」

「幼馴染は二人いるって事、覚えておきなさいよ……」

そう言い残し、鈴はピットを去って行った。

「と、言う訳だから部屋代わって？」

突然、部屋にやって来た鈴が言った言葉である

「ふざけるな!何故私が!！」

寝巻に着替えた篤が鈴に怒る。

「いやあ、篠ノ之さんも男子と同室なんて嫌でしょう?。」

「べ、別に嫌とは言っていない!!」

女の争いを遠巻きに見ている一夏は、下らんと書いた様子でいた。

「とにかく、私もここで暮らすから」

「ふざけるな、ここは私の部屋だ!!出て行け!!」

「ところでさ、一夏。約束を覚えてる？」

「無視するな!こうなったら力づくで・・・」

部屋に立てかけてあった竹刀を取り、鈴に振り下ろそうとした筈の腕が一夏に掴まれていた。

「落ち着け、筈。鈴も無駄に煽るな」

「う・・・」

二人共しょんぼりするのを見て、一夏は話す。

「筈、お前は頭に血が上ると、すぐに竹刀を振るうのは止める・・・」

“分かったな?”と目で叱りつける一夏

「分かった・・・」

今度は鈴の方へと向く

「約束の事だったな・・・料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる。

だったか・・・」

「そう、そうよー!!」

その言葉に篤は目を見開き、鈴は賭け事で逆転リーチが来た時みたいな調子になる。

「もしかして、あれはプロポーズか？」

「え、ええええつと・・・その・・・」

ここまでストレートに聞かれるとは思ってなかった鈴は混乱してしまった。

「そそそそ、そんな訳無いじゃない!!か、勘違いしないでよね!ただの味見係なんだからね!!」

ああ・・・悲しきかな、ツンデレの性・・・

「一夏の馬鹿!アタシの馬鹿あああああつ!!!!」

そう言って泣きながら部屋から出て行く鈴であった。

「・・・何だったんだ？」

「馬鹿者が・・・」

流石の篤も鈴の哀れさに涙を流すのだった・・・

翌日、生徒玄関前に張り出された『クラス対抗戦日程表』

そこに書かれていた一夏の相手は二組の代表となった鈴だった。

第七話（後書き）

あゝあゝ、やっちゃったよ・・

途中までいい雰囲気だったのに・・・

鈴ファンの方すいません

でも結局、一夏は父親的な感情しかない訳です。

鈴に対してもです。

一夏の中学時代の話、兄貴伝説は少し先で語られます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年10月28日03時11分発行